

VIII 研修全体のふりかえり・評価

※受講者に対し、全ての研修終了後に実施したアンケート結果を取りまとめた。

■ 研修への期待と満足度について

受講者の開発教育指導者研修（実践編）（以下、「指導者研修」という）や教師海外研修（以下、「海外研修」という）に対する期待や目的は、「開発教育・国際理解教育の内容・手法・事例を知る」（95%）、「自らの視野や能力を研鑽する」（88%）、「参加型学習・ファシリテーターの能力を高める」（76%）が上位3つとなっている【設問1】。

それらの期待や目標を持った受講者は、研修に対して「とても満足できた」（83%）、「満足できた」（15%）と回答しており、十分に満足度の高い研修であったといえる。

設問1；指導者研修・海外研修に期待したこと・目標としたことは何ですか。（複数回答）

No.	選択肢	回答者数	割合
1	開発教育・国際理解教育の内容・手法・事例を知る	39	95%
2	自らの視野や能力を研鑽する	36	88%
3	参加型学習・ファシリテーターの能力を高める	31	76%
4	世界の現状や日本とのつながりを知る	28	68%
5	実践者同士で交流し、ネットワークを作る	26	63%
6	その他	2	5%
	全体	41	100%

設問2；指導者研修、海外研修は、あなたの期待（あるいは目標達成の支援）を満足させるものでしたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても満足できた	33	83%
2	満足できた	6	15%
3	ある程度満足できた	1	2%
4	あまり満足できなかった＋満足できなかった	0	0%
	全体（無回答1名除く）	40	100%

■ 研修を受けた自分自身の意識の変化について

● 受講者の関心の高まり

受講者の85%が、「受講後により関心が高まった」と回答しており、本研修が受講者の人権、環境、貧困、開発、共生、平和などに関する情報への関心の高まりに寄与しているといえる【設問3】。

設問3；研修を通じて、人権、環境、貧困、開発、共生、平和などに関する情報に関心を持つようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	受講前から関心があったが、受講後より関心が高まった	35	85%
2	受講前はあまり関心なかったが、受講後関心が高まった	2	5%
3	受講前から関心があり、受講後も変わらない	4	10%
4	受講前はあまり関心なかったし、受講後も変わらない	0	0%
	全体	41	100%

研修を通して、受講者自身が「地球上で起きている環境や貧困問題と自分とのつながりについての理解」したり、「国際協力について自分にできることの意識化」をしたりできたかについてみると、前者は「よくわかった」と「わかった」を合わせて88%、後者は「よく考えるようになった」と「考えるようになった」を合わせて95%となっており、本研修は受講者自身の学びや行動に繋がったといえる。

設問4；研修を通じて、地球上で起きている環境や貧困の問題と自分たちの生活とのつながりがわかりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	よくわかった	24	59%
2	わかった	12	29%
3	ある程度はわかった	5	12%
4	あまりわからなかった+わからなかった	0	0%
	全体	41	100%

設問5；国際協力（身近な買い物から直接支援まで）について自分にできることを考えるようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	よく考えるようになった	23	56%
2	考えるようになった	16	39%
3	ある程度は考えるようになった	2	5%
4	あまり考えるようにならなかった+考えるようにならなかった	0	0%
	全体	41	100%

その他、地球市民として、具体的に受講者が気づき、考えるようになった主な内容を以下に示す。

設問6；その他、地球市民として、何に気づき、何について考えるようになりましたか。（主な回答内容）

<世界で起きていることを知ること・学ぶことの大切さ>

- ◇世界で起きていることに以前より関心をもつようになり、知ることの大切さに気づいた。
- ◇すぐに解決できなくても、地球上の問題に関心をもつこと、何かしたいと思うことだけでも意味があり、知ろうとしなければわからないことがたくさんあることに気づいた。

<世界への関心の高まり>

- ◇世界で起きていることは、自分にも関係があるという意識をもってニュースなどで情報を得るようになった。
- ◇自分の身の周りや世界で起こることを、人権、環境、貧困、共生、平和などの観点から考えるようになった。
- ◇地球に生きる人間として、自分を含め全ての人の平和・幸福の根っこには環境、人権があることに気づいた。

<日本（自分）と世界とのつながり>

- ◇世界がつながっていて、その中に自分がいるということ。
- ◇それぞれの国の問題ではなく地球全体の問題として考えなければならない。
- ◇商品や材料ひとつとってもつながりを考えるようになった。
- ◇自分の生活が世界の貧困につながっていることを知り、自分にできることは何かを考えるようになった。
- ◇身の回りで起こっていることも世界の課題も、同じようにわたしたちの課題であり、課題解決に向けて考え発信していく必要がある。
- ◇遠い国に住んでいる誰かのことを考えることの第一歩は、身近な人のことを考え大切にすることから始まる。

<価値観の多様性/多様性を認め合うことの大切さ>

- ◇他者や異文化と肯定的に出会うことの大切さに気づいた。
- ◇多様性を認め合うことが大切で、違いの中にある同一性を意識するようになった。
- ◇他者の考えを自分の考えの尺度で押し量らないことが大切で、「〇〇かもしれない」と多様な考えを持つことが相手を大切にすることにもつながる。

<教育（教育者）の使命と可能性>

- ◇子どもたちに何を伝え、自分にどんなことができるのかを考えるようになった。
- ◇目の前の子どもたちが世界とつながっていけるように種をまきたい。
- ◇子ども達と国際理解教育に取り組みたいと思った。
- ◇わたし・あなた・みんなを大切に思うことが世界につながっていくことを伝えたい。
- ◇自己受容、他者と仲間になり協力し合う共生感覚を子ども達にどのように伝えていくか考えるようになった。

<持続可能な未来を考えた行動>

- ◇持続可能な社会をめざして、今の暮らしを見直し、ただ安いだけでは商品は選ばなくなった。
- ◇自分からアクションを起こし、身近にある小さなことから積み重ねていくことが大切。

● 開発教育・国際理解教育の内容理解

受講者が考える開発教育・国際理解教育の範ちゅうは、受講後にその幅が広がり、特に選択肢（No.8～12）が大きく増えて割合が、17～66%から95～95%と29～71ポイント高くなっている。研修により開発教育・国際理解教育の幅が広がり、「自分たちの生活とのつながりの中で地球規模の課題を考え、解決する意識を育む教育であること、そのためにはスキルトレーニングが必要であること」といった開発教育・国際理解教育への理解が深まったといえる【設問7,8】。

設問7,8：受講前後に考えていた「開発教育」または「国際理解教育」の教育の範ちゅうはどれですか。（複数回答）

No.	選択肢	受講前		受講後		割合増減
		回答者数	割合	回答者数	割合	
1	外国語教育	7	17%	9	22%	5%
2	異文化理解	37	90%	39	95%	5%
3	国際交流	30	73%	34	83%	10%
4	日本の伝統・文化	9	22%	28	68%	46%
5	開発途上国の開発	28	68%	34	83%	15%
6	南北問題	13	32%	28	68%	37%
7	国際協力	31	76%	37	90%	15%
8	在住外国人との共生	19	46%	37	90%	44%
9	人権・環境・平和など地球規模で考えるべき課題	27	66%	39	95%	29%
10	地球規模の課題と自分とのつながり	26	63%	38	93%	29%
11	様々な課題の解決に向かおうとする意識の育成	13	32%	35	85%	54%
12	自己肯定感・コミュニケーション・参加協力に関わるスキルトレーニング	7	17%	36	88%	71%
13	その他	0	0%	3	7%	7%
	全体	41	100%	41	100%	-

■ 開発教育・国際理解教育の実践について

● 実践時間

受講者の開発教育・国際理解教育の実践時間は、「5～9 時間以上」が12人（30%）と最も多く、次いで、「10～14 時間」と「20 時間以上」が各10人（24%）、「1～4 時間」7人（17%）となっており、短時間から長時間まで多様な実践が行われているとともに、10 時間以上の受講者が半数を超え、比較的長時間の実践が行われているといえる【設問9】。

前年度との対比では、「前年度より増加した」が33人（81%）であり、大半の受講者が前年度よりも多い時間の実践をしている【設問10】。

増加した理由として、「研修を契機とした意識や興味関心の変化」「研修を通じた知識や手法、教材の獲得による意欲の向上」「研修を契機とした実践機会の創出」が多く述べられており、本研修の受講が、開発教育・国際理解教育の実践時間を前年度より増加させた大きな契機になっているといえる【設問11-1】。一方、実践時間が減少したのは、担当する教科上の制約や実践環境の変化が主な理由となっている。【設問11-2】

設問9；開発教育・国際理解教育の延べ実践時間

No.	選択肢	回答者数	割合
1	1～4時間	7	17%
2	5～9時間	12	30%
3	10～14時間	10	24%
4	15～19時間	2	5%
5	20時間以上	10	24%
	合計実践時間数	568	時間
	1人当たり平均実践時間	13.8	時間/人

設問10；前年度に比べた実践時間の変化

No.	選択肢	回答者数	割合
1	前年度より増加した	33	81%
2	前年度と変わらない	5	12%
3	前年度より減少した	3	7%
	全体	41	100%

設問11-1；実践時間が増加した理由は何ですか。（主な内容）

<研修を契機とした意識や興味関心の変化>

- ◇意識が高まり、さまざまな教科を結びつけるようになった。
- ◇研修を通して、様々なテーマを学び、授業で取り上げたいテーマが決まった。
- ◇自分の開発教育・国際理解教育に対する意識が変わった。 ◇自分自身の興味関心が高まった。
- ◇受講したことにより、自分のやりたい授業をもっとやってみようと思えた。
- ◇本研修に参加したことで、意識をして取り組むことができ、実践しようという意欲が高まった。
- ◇学習内容を、異文化体験だけでなく、自己や他者理解、世界の問題に広げたため。

<研修を通じた知識や手法、教材の獲得による意欲の向上>

- ◇自分の知識も増え、やりたいことが増えた。 ◇参加型の手法を学び、実践したい中身が増えたため。
- ◇開発教育・国際理解教育を教師自身が学び、知識が広がった。
- ◇私自身が国際理解教育や参加型学習の手法についてよく理解できた。
- ◇教師海外研修で学んだことや感じたことを、実践で活かしたかった。
- ◇授業の進めかた、アクティビティの手法などを学び、実践のネタが増えた。
- ◇この研修で多くのことを学んだので、子どもたちに伝えたいと思った。
- ◇研修に参加しその手法を知り、効果を実感し、学校で様々な機会をとらえて実践した。

<研修を契機とした実践機会の創出>

- ◇教師海外研修の実践で授業を行ったから。 ◇本研修を受講し、成果発表をするため。
- ◇研修で学んだことを実践につなげたり、教師海外研修で得た情報を生徒に伝えたから。
- ◇研修の実践を行ったのと、大学での講義が1時間増えたため。
- ◇自ら実践できる場を探し、積極的に活動を行った。

<現場の環境、変化、理解>

- ◇総合学習のカリキュラムに「世界に学ぶ、世界発見！」というテーマで時数が設定されていた。
- ◇本校の総合的な学習の時間の3年計画を作成、その1年目（第1学年）として計画的に取り組んだため。
- ◇今年度は高学年で、総合で国際理解教育について取り組める環境が整っていたため。
- ◇国際理解教育を扱うクラス数が増えた。 ◇学校内の外国人生徒の増加。
- ◇職場環境の変化により、自分の関心ごとに向き合う余裕ができた。
- ◇学校のクラブ活動で、「世界体験クラブ」という国際理解教育のクラブを立ち上げた。
- ◇学年の先生方がとても協力的で、学年全体で取り組めた。
- ◇国際理解教育、参加型授業に対する職場の理解がすすみ、機会を多く設けることができた。

設問 11-2；実践時間が減少した理由は何ですか。（主な内容）**<教科に関する時間的制約>**

- ◇昨年度は総合の時間に国際理解の分野があったため、そこで毎週1時間活動することができたが、今年度はその時間がなかったため、道徳の時間を用いて実践した。
- ◇総合の時間や道徳の時間を使うには、周りの人の協力を得ることが難しかった。
- ◇教科の担当が変わったため

<担当教科の特性>

- ◇英語の授業で時間を使うには、日本語の要素が多すぎて難しかった。
(同学年の英語の先生は3人。1時間は私が各クラスで出張授業をさせてもらえた)。

<立場の変化>

- ◇学校が変わったのであまり時間数はできなかった。実践内容は濃いものになった。
- ◇担任学級でないので、時間の制限もあった。

● 実践内容

前年度に比べて実践内容は深まったかどうかについては、「とても深まった」67%、「深まった」26%、「ある程度深まった」25%との回答が得られ100%の受講者が、実践内容が深まったとしている【設問 12】。

その理由は、「研修の質と量」「開発教育・国際理解教育への理解の深まり」「参加型の理論と方法理解とスキルの習得」「学びの継続、経験の蓄積、意欲の高まり」「十分な実践時間確保と授業計画の立案」「多様な仲間との対話と刺激」「リソース・教材の入手と活用」などとなっている【設問 13】。一方、あまり深まらなかったのは、「自分の現場で学習者主体の授業をする難しさ」「自分の経験と自信のなさ」「自らの教材研究の不足」が理由となっている。

設問 12；前年度に比べて本年度の実践内容はどのようになったと思いますか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても深まった	26	67%
2	深まった	10	26%
3	ある程度深まった	3	7%
4	あまり深まらなかった + 深まらなかった	0	0%
	全体（無回答2名除く）	39	100%

設問 13；実践内容が深まった理由は何ですか。

<研修で学んだ方法、スキルの活用>

- ◇これまで知らなかった手法を知り、実践に生かすことができた。 ◇実践方法を研修で学ぶことができた。
- ◇この研修で学んだことを生かすことができた。 ◇様々な手法や、活動の意義を知ることができた。
- ◇資料の集め方や活用方法を学ぶことができた。 ◇起承転結を大切にしようと試みたから。
- ◇アクティブラーニングの活用方法を知り、効果的に用いることができた。
- ◇文化や日本とのつながりを、様々な手法を使うことで、生徒がより深く感じられる授業になった。
- ◇研修で学んだ参加型の手法を用いることで、生徒の意見を引き出すことができた。
- ◇様々な手法やプログラム作りのノウハウを生かすことができた。
- ◇手法やスキルを得たことで、この題材にはこの手法で考えるのが適しているとわかるようになった。
- ◇ステップを細かく踏ませることを意識して実践を行った。 ◇自己理解、他者理解につなげていったため。

<研修を通じた経験値や自信・意識の高まり>

- ◇自分自身の研修参加による経験値アップやスキルアップ。 ◇研修を通して理論と実践がつながってきた。
- ◇実際に見聞きしたことで授業を行うことができたため。
- ◇教科書やインターネットなどの知識だけでなく、自分が見たり聞いたりしたことから授業作りができ、子どもたちにとって身近な内容として考える事ができた。
- ◇国際理解についての教師自身の考えが深まり、生徒に何を学ばせたいのか明確になったため。
- ◇自分のねらいや願いがより深まり、それがプログラム作りや授業中の言葉がけなどに反映したから。
- ◇自分自身の開発教育・国際理解教育への理解が深まっているから。

<教師海外研修の体験の活用>

- ◇教員海外研修や事前のファシリテーションの学びから、実践したい中身に対しての考察が深まった。
- ◇自分の海外研修の実体験を軸に話すことができたことが、実践の深まりにつながった。
- ◇教師海外研修を通して集めた資料や自分の体験をもとに、実感を伴った指導ができたから。
- ◇実際にパラグアイに行くことができ、世界の生の現状を知ることができた。 ◇教師海外研修への参加。

<研修の複数回の受講による深まり>

- ◇2年連続で受講して、去年学んだことを普通の授業で活かすことができるようになったから。
- ◇昨年は教えることが多かったが、研修で学んだ参加型の手法を本年度はたくさん取り入れた。
- ◇昨年度から引き続いての実施だったため。 ◇昨年度よりもプログラムの精度が増したため。

<子どもたちの様子、変化や効力感の実感>

- ◇ファシリテートの技術が身に付き、生徒が参加型の学びに意欲的に取り組んだため。
- ◇生徒が多様な意見に触れ、他者から学ぶことができたから。
- ◇生徒が自ら考えたから、積極的に関わったから。 ◇参加型の手法に、私も子どもも慣れてきたため。
- ◇友だちの意見を大切にしようとする意識が高まったから。
- ◇様々な手法を取り入れた参加型の授業を考えることができ、子どもたちの反応もよかったから。
- ◇これまで扱っていなかったテーマを子どもたちといっしょに考えることができた。
- ◇世界の問題から身近な問題に置き換えながら進めたので、実感を伴って進めることができた。

<リソース・教材の入手と活用>

- ◇様々な教材、資料があることを教わり、利用したり自作で作ったりしたから。
- ◇多様な校種や教科の実践を知り、多角的にアクティブラーニングについて考えることができたから。

<十分な時間の確保と授業計画>

- ◇総合的な学習の時間においての実施のため教科よりも柔軟にできたため。
- ◇単発の学習ではなく、子どもの実態に合わせて単元計画を立て、しっかりと取り組むことができたから。
- ◇研修を受け、授業の組み立て方を工夫し、内容が濃くなった。
- ◇今年度は自分で企画・実施まで行うようになったから。 ◇学年も上がり、手法の活用も広がった。
- ◇総合学習や社会科で学習して知識として知っていることを活用しながら、課題について考えたから。

<多様な仲間との対話・刺激>

- ◇研修中に他の参加者の方の意見・考えを聴けたことで実践時の予測が立ちやすくなった。
- ◇スキルを身に着け、職場に広めた結果、一緒に教材研究をしてくれる同僚が増えた。
- ◇参加者の小さな声を聞きながら、広げたり、理由を聞いたりしたから。
- ◇参加者のやる気に触発。 ◇仲間の実践から学んだから。
- ◇ワークショップでの経験、先生方との意見交換が、自分自身の深い学びにつながったから。

● 参加型のスキル

開発教育指導者研修（実践編）は、行動変容を支え関係性を育む「参加型」と参加型で学び合う場を提供するファシリテーターの役割を理解し、自ら習熟することをねらいに定めて実施した。これらのねらいに対し、受講者がどの程度理解し習熟したかを3つの指標で評価した結果は以下のとおりである。

1つ目の指標「気づきから行動へつながるプログラムの作成」については、「とても作れるようになった」7%「作れるようになった」44%、「ある程度作れるようになった」44%であり、ほとんどの受講者がプログラムの作成スキルが向上したと認識している【設問 14】。

2つ目の指標「学習者主体の手法の活用」については、「とても使えるようになった」20%「使えるようになった」46%、「ある程度作れるようになった」32%であり、プログラムの作成スキルよりも多くの受講者が学習者主体の手法の活用力が向上したといえる【設問 14】。

3つ目の指標「理解・実践した参加型の手法」については、「アイスブレイキング」88%、「フォトランゲージ」78%、「派生図・因果関係図」78%、「ブレインストーミング」76%、「対比表」61%「カード式整理法（KJ法）」46%といった主要な参加型手法については半数程度以上の受講者が実践している。一方、「ロールプレイ」29%、「指標づくり」27%の活用は低くなっており、手法により実践度に高低差が見られた【設問 15】。

その他、受講者が「場づくり、学習者の主体性、学習者同士の学び合いを進めるファシリテーターとして、あなたが心がけたり、実践したりしたこと」に関する主な回答は、次ページのとおりである。

設問 14；研修や実践を通じて、流れに沿って気づきから行動へとつながるプログラムを作れるようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても作れるようになった	3	7%
2	作れるようになった	18	44%
3	ある程度作れるようになった	18	44%
4	あまり作れるようにはならなかった	2	5%
5	作れるようにならなかった	0	0%
	全体	41	100%

設問 15；研修や実践を通じて、学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや参加型の手法を使えるようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても使えるようになった	8	20%
2	使えるようになった	19	46%
3	ある程度使えるようになった	13	32%
4	あまり使えるようにはならなかった	1	2%
5	使えるようにならなかった	0	0%
	全体	41	100%

設問 16；次の参加型の手法のうち、進め方を理解し、実践した手法はどれですか。(複数回答)

No.	選択肢	回答者数	割合	No.	選択肢	回答者数	割合
1	アイスブレイキング	36	88%	6	カード式整理法(KJ法)	19	46%
2	フォトランゲージ	32	78%	7	ランキング	17	41%
3	派生図・因果関係図	32	78%	8	ロールプレイ(なりきり紹介)	12	29%
4	ブレンストーミング	31	76%	9	指標づくり(○箇条づくり)	11	27%
5	対比表	25	61%	10	その他	6	15%
					全体	41	100%

設問 17；場づくり、学習者の主体性、学習者同士の学び合いを進めるファシリテーターとして、あなたが心がけたり、実践したりしたことを教えてください。(主な内容)

<プログラムづくりに関する心がけ>

- ◇授業のねらいをしっかりとて、流れのある活動にできるように心がけた。
- ◇知らせる、教えるのではなく、子どもの気づきを引き出す発問や教材を使用した。
- ◇どのような生徒も世界の課題に目を向け、主体的に関われる方法を、他教科の先生たちと共に考えた。

<学びに向けた雰囲気づくりに関する心がけ>

- ◇積極的に発言や行動ができる雰囲気づくりに心がけ、一人ひとりの発言を大切にした。
- ◇自分の考えをみんなに伝えやすいようなアイスブレイキング、ルールづくり、雰囲気づくり。
- ◇全員が参加できるような心がけ。 ◇安心感のある雰囲気づくり。
- ◇仲間の意見を否定せず、肯定的に温かく受け止める雰囲気づくり。

<学習者の意見への対応に関する心がけ>

- ◇意見や思いが尊重され認められる経験ができること。
- ◇発言の時間が平等になること。 ◇積極的に参加したことを評価する。
- ◇焦らず、子どもの反応を見ること。 ◇否定はせず、笑顔で、受け止めて聴く
- ◇学習者の気づきや心の声を見逃さない。 ◇生徒の意見に共感したり、同感したりする。
- ◇1人ひとりの意見に生徒自身も肯定的に出会えるようにフィードバックする。

<発問、情報提供に関する心がけ>

- ◇子どもが受けとった印象や感想を大切にするため、自分の印象を話さないようにした。
- ◇答えを言わず、子どもたちの気づきを促すための声掛け。
- ◇十分な情報を提供するが、説明や補足、解説などし過ぎない。
- ◇生徒がやることをクリアにするために、観点を絞った問いかけを行うこと。
- ◇話したことを次の行動につなげられるようにする。

<学習者への信頼に関する心がけ>

- ◇生徒が自ら学ぶことができると信じること。 ◇子どもたちの考え・発言を信じて待つことを心がけた。
- ◇学生の意見を待つ。楽しそうにやる。ワーク中はなるべく口出ししない。

<子ども同士の関係、役割、グループ活動に関する心がけ>

- ◇共有する時間を多くとり、グループや班での話し合いを取り入れる。

- ◇お互いに否定しないで、いろんな意見を大切にしてみんなで深められるようにした。
- ◇発言させるだけでなく、子ども同士の学び合いの時間が多くなるように努めた
- ◇グループ活動の中で、自分の発言に自信を持てるような声かけ。
- ◇子どもたちが考えたことを「自分の言葉」で表現し、仲間と共有できるようにした。

■ 学習者の変化や周りへの波及効果について

● 学習者の変化

開発教育・国際理解教育の実践により学習者のより良い変化があったかについては、「とても変化があった」「変化があった」と合わせて受講者の76%が学習者のより良い変化を強く実感している【設問18】。

より良い変化の中身については、「開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった」69%、「自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった」69%、「学ぶことを楽しむようになり、主体的または継続的な学びに取り組む意欲が育った」51%が上位3位となっている。また、「自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った」46%、「自らの生き方や共生について考えるようになった」38%、「話す・聴く能力と態度が向上し、良好な人間関係を築くことにつながった」33%といった変化の実感があつた受講者も1/3以上となっている。

これらのことから、受講者の実践により、「様々な課題の解決に向かおうとする意識の育成」や「自己肯定感・コミュニケーション・参加協力に関わるスキルトレーニング」に関し、学習者のより良い変化が現れているといえる【設問19】。

設問18；開発教育・国際理解教育の実践により
学習者により良い変化がありましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても変化があった	14	34%
2	変化があった	17	42%
3	ある程度は変化があった	8	20%
4	あまり変化はなかった	2	4%
5	変化はなかった	0	0%
	全体	41	100%

設問19；学習者にどのようなより良い変化がありましたか。(複数回答)

No.	選択肢	回答者数	割合
1	開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった	27	69%
2	自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった	27	69%
3	学ぶことを楽しむようになり、主体的または継続的な学びに取り組む意欲が育った	20	51%
4	自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った	18	46%
5	自分の生活を振り返り、世界の人権や環境を大切にする意識が高まった	17	44%
6	自らの生き方や共生について考えるようになった	15	38%
7	話す・聴く能力と態度が向上し、良好な人間関係を築くことにつながった	13	33%
8	自分に出来る国際協力への取組みに関心を持つようになった	10	26%
9	その他	4	10%
	全体	39	100%

● 開発教育・国際理解教育以外の活動への波及

受講者の95%が開発教育・国際理解教育における参加型の手法や考え方何らかの活動に取り入れている。具体的には、「コミュニティづくり(学級・地域)に取り入れた」46%、「学級の決め事に取り入れた」41%、「研修に取り入れた」33%、「ミーティング・会議に取り入れた」23%となっている【設問20】。

設問 20；参加型の手法や考え方を、自分の活動に関係することに取り入れられましたか。(複数回答)

No.	選択肢	回答者数	割合
1	コミュニティづくり(学級・地域)に取り入れた	18	46%
2	学級の決め事に取り入れた	16	41%
3	研修に取り入れた	13	33%
4	ミーティング・会議に取り入れた	9	23%
5	その他	7	18%
6	どこにも取り入れていない	2	5%
	全体(無回答2名除く)	39	100%

● 学校や団体内の他の職員への波及

所属する学校や団体内の他の教職員に対して、研修で学んだ開発教育・国際理解教育や参加型の手法などを伝えた受講者は全員であり、本研修は受講者により他の教職員への波及も得られていることがわかる。

その具体的な方法は、「日常のやりとりの中で伝えた」が68%と一番多く、次いで「校内・団体内での報告会・研修会で伝えた」37%、「研究発表(公開授業など)で伝えた」34%、「共同で教材を作成する際に伝えた」27%となっている【設問21】。

伝えた人数は、全体で1,093人、1人当たり約27人であり、波及効果は大きいといえる。

周りへの波及の環境として、実践活動への所属する学校や団体の上司や同僚の理解については、「とても理解している」、「理解している」、「ある程度は理解している」を合わせて93%と、多くの受講者は周りの理解のもと実践活動ができている。その一方で、7%の受講者は理解が得られていない環境で実践を余儀なくされているという実態もある【設問22】。

設問 21；所属している学校や団体において、研修で学んだ開発教育・国際理解教育や参加型の手法などを他の教職員等に伝えましたか。(複数回答)

No.	選択肢	回答者数	割合
1	日常のやりとりの中で伝えた	28	68%
2	校内・団体内での報告会・研修会で伝えた	15	37%
3	研究発表(授業公開など)で伝えた	14	34%
4	共同で教材を作成する際に伝えた	11	27%
5	その他	5	12%
6	どこにも伝えていない	0	0%
	全体	41	100%

設問 22；所属する学校や団体の上司や同僚は、あなたが行う開発教育・国際理解教育や参加型の実践活動を理解してくれていますか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても理解している	15	37%
2	理解している	7	17%
3	ある程度は理解している	16	39%
4	あまり理解していない	3	7%
5	理解していない	0	0%
	全体	41	100%

● 直接提供事業と比較した本研修による学習者への還元効果

開発教育支援の一つとして行っている「JICAが直接学習者に対して教授する国際協力出前講座、JICA施設訪問プログラム等(直接提供事業)」に対し、本研修は、養成された開発教育を進める中核的な指導者が研修で得た知識や能力を生かして、自らの現場で多くの学習者に対して継続的に還元することが期待されている。

研修受講者の実践実績から、直接提供事業の場合と比較した本研修による還元効果を計算すると、下記のとおり単年度当たり 12.2 倍となった。さらに、継続年数を加味すると、還元効果は 20 倍にも 30 倍にもなると考えられる。このほか、研修受講者は、研修で得た知識や能力、自らの実践などを他の指導者に伝達しており、そのことによる一定の還元効果も見込むことができる。

これらのことから、直接提供事業と比較して、本研修による学習者への還元効果は単年度実績として 6.4 倍、複数年、他の教職員への波及効果を加味すると、より多くの還元効果があるといえる。

◇研修受講者による延べ還元量＝36,356 人・時間／年
◇研修で受講者に対して行った還元量＝開発教育指導者研修（実践編）受講者数 41 人×研修時間数 33 時間＋教師海外研修受講者数 16 人×研修時間数 102 時間（国内 22 時間＋海外平均 8 時間×10 日）＝2,985 人・時間／年
◇還元効果（倍）＝36,356 人・時間／年÷2,985 人・時間／年＝約 12.2 倍

● 開発教育・国際理解教育ネットワークづくりへの波及

1 年間の研修や実践を通じた開発教育・国際理解教育ネットワークは、すべての受講者ができたとしている。具体的内容は、「受講者同士」93%、「実践報告フォーラム参加者」37%、「実践を通じたネットワーク」5%となっている。【設問 23】。

設問 23；1 年間の研修を通じて、開発教育・国際理解教育のネットワークができましたか。（複数回答）

No.	選択肢	回答者数	割合
1	受講者同士でできた	38	93%
2	フォーラム参加者とできた	15	37%
3	実践を通してネットワークができた	2	5%
4	その他	3	7%
5	できなかった	0	0%
	全体	41	100%

● JICA 中部の開発教育・国際理解教育に関する支援メニューの活用度

受講者の JICA 中部の開発教育・国際理解教育に関する支援メニューの活用度は 93% と高い。

活用度が高いメニューは、「JICA ホームページ等の情報」66%、「開発教育・国際理解教育に使える教材の提供・閲覧」56%、「各県で行う開発教育指導者研修（初級編）」32%、「なごや地球ひろばで開催する JICA 主催講座・イベント」32%、「JICA 中部メールマガジン「なごや地球ひろば便り」」27% などとなっている。

設問 24；JICA 中部の開発教育・国際理解教育に関するメニューのうち、これまで活用したり、参加したりしたものはどれですか。（複数回答）

No.	選択肢	回答者数	割合
1	JICA ホームページ等情報の活用	27	66%
2	開発教育・国際理解教育に使える教材の提供・閲覧	23	56%
3	各県で行う開発教育指導者研修（初級編）	13	32%
4	なごや地球ひろばで開催する各種講座・イベント	13	32%
5	JICA 中部メールマガジン「なごや地球ひろば便り」	11	27%
6	なごや地球ひろば訪問プログラム	9	22%
7	国際協力出前講座	9	22%
8	中学生・高校生エッセイコンテスト	4	10%
9	グローバル教育コンクール	1	2%
10	活用・参加していない	3	7%
	全体	41	100%

■ 全体を通して

● 最も大きな学びや変化

「受講者の1年間の研修を通じた最も大きな学びや変化」についての回答は、以下のとおりである。

設問 25；1年間の研修を通して、あなたの最も大きな学びや変化は何でしたか？

<教育観・教育内容の変化>

- ◇大学で学んだ国際開発について、教職の道に進んだあとは、なかなかそれを子ども達に伝えることは難しいと感じていたが、もっとシンプルに捉えることが大切だと思うようになった。
- ◇社会科や外国語、総合学習の授業にカリキュラムに入っていないと国際理解教育の実践は難しいと思っていたが、そうではなく、社会の一員として今の自分にはどんなことができるのかを考えていけるような授業作りをしていきたいと考えるようになった。
- ◇開発、国際協力は身近なことから始めることができることに気づき、実際に6年生のまとめとして、開発・国際協力について進めることができた。
- ◇以前は、参加型という「手法」を重要視していたが、この1年を通して、持続的な社会形成のために必要な手段（自ら考え発信する参加型で他人事から自分事にシフトする）として考えるようになった。
- ◇学びをまずは自分も楽しむということがわかったのが大きな学びだった。
- ◇大きなテーマを学ぶ時、ファシリテーターの導き方によっては他人事になってしまいがちなところ、ワークショップを作る際は慎重に計画を練ることが大切だと理解した。
- ◇相手（人も国も）を肯定的に受け止めることで、心が近づき、自分事として捉えられるようになり、世界とつながっていきける。
- ◇実際にアフリカの地を体感し、協力隊の方々と話をする中で、支援のあり方について考えるようになった。短期長期両方の支援をどう組み合わせることが効果的なのかを考えることは、そのまま教育にもつながると思った。

<自分の変化、児童生徒などの変化を通じた参加型の効果の実感>

- ◇この教育への関心が更に高まり、方法や大切なことを学んだことは自信につながった。
- ◇友達と学び合うことで、自主性や共感力を育むことができる。
- ◇これまでは伝え方を意識していたが、この研修を通して伝わり方も考える大切さを学んだ。
- ◇ソーシャルスキル、コミュニケーションスキルを高めることもでき、学級運営に非常に有効。
- ◇この教育は自己を見つめ直す機会となり、自己肯定感を高め、人間形成のための教育である。
- ◇子ども達が「楽しい！」と思える授業作りの大切さを改めて感じた。子どもが「楽しい！」「やってみたい！」と思えるような教材、課題設定を見極めていきたい。
- ◇特別支援学校や特別支援学級でも子どもたちの実態に合わせて実践ができること。
- ◇参加型の手法を取り入れることが、様々な課題に気づき、考え、話し合い、行動していく子供たちを育てることにつながる。
- ◇参加型を自分が経験することで手法が分かり、その面白さや意味を感じることができた。
- ◇自分自身の授業力向上への意欲が高まり、生徒の社会問題への関心が高まった。
- ◇ソーシャルスキル、コミュニケーションスキルなどの育成や学級運営に有効だと分かった。
- ◇参加型の手法を通して、子どもたちの意欲的な姿が生まれる。
- ◇子どもたちにとってこの教育は、身近な自分たちの現状を振り返る良いきっかけとなる。

◇不登校や引きこもりなどで「自分は社会の役立たず」だと否定的に思っている生徒が、社会と自分のつながりを知り、社会のことを考えるようになると、自分が社会の一員であり、役に立っている意識が芽生え、心が楽になっていくことに気づいた。

<他者、社会、世界への関心の高まり、視野の広がり、視点の変化>

- ◇パラグアイをはじめ、国外のニュースに敏感になった。他人事だったことが自分事となった。
- ◇自己理解、他者理解への興味関心が広がり、そういう実践を積み重ねていきたいと思った。
- ◇身近な問題から地球規模の問題まで、幅広く目を向け、自分事として考えていくことが大切。
- ◇開発教育で他者や他国を知ることは、自分や自国を知ることにつながると気づいた。
- ◇世界の人々のことを考えることは、身近な他者について考えることと同じだった。
- ◇他人事になりがちな世界の課題も、自分の身近なところから考えると他人事では済まなくなる。

<自分自身の行動の変化、スキルの向上>

- ◇参加型について学び、ねらいの重要性、流れの大切さなどに気づくことができた。
- ◇ファシリテーターとしてのスキルアップができ、いろいろな手法を実践できるようになった。
- ◇参加型について学んだことで、もっと学びたい、もっと伝えていきたいと思うようになった。
- ◇自分自身が変わることがすごく大切！！少しずつ周りに自分の思いが伝わり、ポジティブな方向に向かっていくことを感じた。
- ◇教師海外研修に行き、世界はつながっているとはこういうことか、と身をもって実感することができ、何かを考えるとときには、日本という枠や常識をより取り払って考えるようになった。
- ◇学年通信の内容、授業で話す内容などにも変化があり、自分の行動の多くに影響を感じる。
- ◇「共生」や「人権」といったキーワードを元に、ESDの視点に立ち考えるようになった。
- ◇様々な諸問題を知り体験することが必要だと感じ、講座に積極的に参加するようになった。
- ◇他者と関わりあって学び合える場をつくることを意識するようになった。教科や道徳の授業でも参加型の手法を使って生徒の意見を引き出すことができるようになった。
- ◇地球規模の課題に対し、自分には地球市民の一員としてできることがあるのだと気づいた。
- ◇自分自身が学習者になることで、楽しさを伝えたいと思えるようになった。
- ◇自分の価値観に改めて気づくことができた。自分が理解していると思ったことも、実は理解が浅かったり、全く理解ができてなかったりする部分があるのだと思った。この研修でさまざまな人たちと関わり、話をする中で国際協力、国際理解のみならず、自分自身の生き方（身近なところにも多様性がこんなにもあるのだということ）についても深く理解し、考えることができた。

<仲間との出会いと協働、仲間からの刺激を通じた自身の変化>

- ◇多くの方と関わることでさまざまな考えを知ることができ、自分の学びを深められた。
- ◇志を同じくする、熱意ある多くの仲間との出会いがあったこと。
- ◇自分と同じ志をもった仲間がたくさんいるということがとても心強く、以前より積極的に実践していこうと思うようになった。仲間と出会いは自分の世界を広げた。縁をつなげていきたい。

● 研修で得られた気づきや学びの今後を活かし方

研修で得られた気づきや学びを今後どのように生かしていくかの意見は以下のとおりである【設問 26】。

設問 26；具体的にどのように活かしていきたいと考えていますか。

<教科教育・総合学習・学級経営・特別活動へ参加型の導入>

- ◇国際理解だけでなく、職場のミーティングや、学生との企画の際にも手法を取り入れたい。
- ◇日々の授業実践の中で、子どもたちのつながりづくりや主体的な学び作りに活かしたい。
- ◇自分の教科の実践や学級経営などに生かしていきたい。1年間で学んだことを整理し次の実践準備をしたい。
- ◇教科や領域に関係なく、様々な機会に参加型を取り入れ、子ども主体的の学びを心掛けたい。
- ◇来年度以降も、少しずつ英語の授業や学活の中で取り入れていきたい。
- ◇参加型の手法は、学級作り、会議、研修の中にも積極的に用いていきたい。
- ◇教科と絡めながら、参加型と起承転結のストーリーを大切に、授業づくりをしていきたい。
- ◇学級経営でアイスブレイクを活用していきたい。楽しく、笑顔で元気に授業をしていきたい。

<学びと実践の継続とブラッシュアップ>

- ◇今後は新しい職場や生活環境で、他者との関係を築くところから研修で学んだことを生かしていきたい。日常生活の中で自然に実践できるようにしたい。どの学年にもどの学校にも学びを深めていきたい。
- ◇研修で得たスキルを特別支援学校ではどのような形で提供できるか考え、教材の工夫に努める。
- ◇さらにファシリテーターとしての力を高めていきたい。
- ◇研修で得た出会いや学びをここで終わりにしないように、今後できることを考えていきたい。
- ◇さらに検証と実践を重ねることでレベルの高い授業にしていきたい。
- ◇もっと開発教育、参加型、持続可能な社会などについて知識を増やし、行動していきたい。
- ◇さらなる学びにつなげていきたい。伝え方を工夫したい。
- ◇出会った人と今後もつながり、互いの実践について交流したい。
- ◇パラグアイの体験談は、国際理解教育に入るきっかけとして今後も子どもたちと共有していきたい。参加型の手法は、学年に応じていろいろなやり方を積極的にとりいれていきたい。
- ◇今後も積極的に参加型に取り組む。フォーラムや研修を通して「実践できそう」と思ったものをやってみる。
- ◇生徒が楽しみ、主体的に考える授業作り。ただし、生徒が自分の力になっていると感じるような教材、アクティビティを工夫する。活動を成績評価に加え生徒のモチベーションを持続させる。
- ◇フォーラムで他の受講者が低学年を対象に行った実践内容を参考に、人との関わり方や自己肯定感を高めることはどの学年でも加納だと感じた。今後は、学年に関わらず開発・国際協力に関わる学習を行いたい。

<開発教育・国際理解教育で学んだ視点の還元>

- ◇子ども達に伝わるような工夫をして直接還元していくことはもちろん、同僚や保護者と協力して子どもたちにとって良い環境をつくってきたい。
- ◇研修で得た知識や手法、コミュニケーションスキルを日常的に活用することで自分のワークスタイルにする。
- ◇生徒の自己肯定感を高めさせ、国際貢献できる生徒を育てていきたい。
- ◇学校教育の中で参加型の手法を用いて、生徒の主体性を育てたい。自分の思いや考えを伝える、相手の意見を聞く、他者と関わり合っって学ぶことのできる生徒を育てたい。
- ◇世界とのかかわりを実感したり、様々な国と肯定的に出会う体験の機会をつくったりして、生徒の視野を広げ、地球に生きる一員として地球規模の課題解決のためにできることを一緒に考えていきたい。

- ◇日常的に子どもを含めた市民と関わる場で働きかけている為、「わたし」「あなた」「みんな」の視点で人権・環境、日本・世界についてそれぞれが考え、発信できる場を創っていききたい。
- ◇平和、人権、環境などの問題を主体的な学びをとおして私自身考えていくとともに、生徒にもその機会をもっと設けていき、自分自身を大切に、社会に参加する意欲を育てていききたい。
- <仲間を増やし、学年全体の取り組みとなるような働きかけ>**
- ◇今後も子どもたちや同じ職場の職員たちに伝え、興味をもってもらいたい。
- ◇まずは勤務校の教員に、国際理解教育の大切さや楽しさをもっと広めたい。
- ◇国際理解教育や参加型学習をやってみたいけどまだ一步を踏み出していない仲間に伝えたり、一緒に実践をしたりしていききたい。
- ◇開発教育、国際理解教育の有効性・有用性・必要性をいろいろな視点やいろいろな方法で周りに伝えたい。また、自分の実践も重ねることで、より進化させていききたい。
- ◇ここで学んだことを職場で共有し、来年度のカリキュラムにどのように取り入れるか考えたい。
- ◇開発教育、国際理解教育の実践を進め、子どもたちにも、教員の仲間たちにも広げていききたい。
- <教材・カリキュラム開発・情報共有>**
- ◇子どもたちに実践を通して伝えていくことはもちろん、本校の全学年で国際理解教育に取り組んでもらえるよう、カリキュラムを作成する。
- ◇弥富市内の全中学校（3校）で、国際理解教育のアクティブラーニングを行ってもらえるよう、作成したカリキュラムや指導案、資料の共有を図る。
- ◇研修や研究授業を通して、学校内で共有しつつ、学校の現状に合った教材を開発していききたい。
- <これからの自分の生き方への反映>**
- ◇多様性があることを受け入れる。 ◇自分自身も社会の課題に関心を持ち、考えていく。
- ◇研修で得たコミュニケーションスキルや、自己受容をライフスタイルにして、幸福感を日々感じていききたい。
- ◇子どもたちだけでなく、大人にも伝えたい。そして自分の生き方そのものにも生かしたい。
- ◇自分自身の生活の中でも、世界とのつながりや自分ができることを考え今まで以上に行動に移していききたい。

■ 研修・実践報告フォーラムをより良くするための提案

● 開発教育指導者研修(実践編)をより良くするための提案

主なものは以下のとおり。

<受講者の構成>

- ◇受講者の選考は年齢バランスを考慮してほしい。年齢層が多様になるよう広報で働きかける。
- ◇三重県の人にもっと多く参加してほしい。

<研修の内容全般>

- ◇日本における子どもの貧困や外国人労働者に対する差別など身近な問題を取り上げるとよい。
- ◇「開発教育＝海外の取り組み」という受け取り方をする人が多いので、日本の地域の内容を扱うことに関しても視点がいくような内容を取り入れて欲しい。
- ◇より具体的にどうしたら問題解決できるのか。具体的な行動を模索するようなアクティビティがあると、ワークショップの可能性や意味がより強く参加者に入り込むのではないか。
- ◇教材の開発についての研修の時間もあったらよい。
- ◇受講者全員と話すには時間が足りないのは十分に承知だが何かうまいグループ分けの方法はないか。

◇時間が掛かったとしても、上手くまとまらなかったとしても、考えることの大切さを伝えるようなアクティビティをまず始めに入れるとその後のワークショップでもそれぞれの人が少しは意見を言いやすくなる。

<第3回研修の内容>

◇各自の実践計画を立てる時間をもう少しとってあると助かる。

◇フォーラムの有志ワークショップメンバーを決める際、教師海外研修受講者同士で固まらないようにする。

<第4回研修の内容>

◇翌日のフォーラムの個人発表の準備は、今回より早い時間であったらよりよい。

<第3回と第4回研修の間>

◇8月の第3回研修から2月の第4回研修までかなり時間があり、どのような実践をするか一人で悩んでいたもので、間に1回くらい情報共有の時間があるといい。

◇第3回から第4回研修までに期間が空いたので、自分が計画した実践でよいのか不安があった。計画をもちよって検討できる場があるとよい。

◇実践前に校種ごとに授業内容を点検し合う機会があるとなお良い。

◇2学期の間は実践期間中、どこかで一度研修を入れていただけると、実践での悩みや授業案など相談できる。

◇希望者だけでも、実践前に自分が考えたプログラムを皆に伝え、それを検討・討論する機会があるといい。

◇実践フォーラムの前の準備が忙しかったため、もう1回分研修として準備期間や相談期間があるといい。ポスター発表までが不安も多かったので、2学期にも一度、現状報告できる場があればよい。

● 実践報告フォーラムをより良くするための提案

主なものは以下のとおり。

<ポスターセッション>

◇10分4回を続けて実施するのは大変なので、奇数と偶数を交互にする。

◇4回立て続けに実践報告するのは大変なので2回に分ける等工夫されると落ち着いてできる。

◇発表時間を半分にすると回数も2倍になるとよい。発表は短く完結に紹介できるので。

◇偶数、奇数のそれぞれの仲間のもものがもう少しじっくり見られるとよい。

◇聞く発表を全部事前に決められないので、移動の時間を長くし、選ぶ余裕があるとよい。

◇聞く発表を決める時間に、テーマ名を読み上げ、会場をぐるりと一周して見てもらうとよい。

(セッション第1回目がA会場に偏るのを防ぐ)

◇B会場である自分の発表の参加者は、1回目のセッションが2人、4回目が10人以上となったので、そのバランスを取れるようにする(例：B会場から回る人を自己判断で行っていただけるよう案内)。

<実践体験ワークショップ>

◇時間はもう少し短くても良い。

◇ワークショップ実践を受講者全員ができると、学びが増えたかもしれない。

<その他>

◇みんなで作った掲示物「良いファシリテーターの「あ〜ん」など」の紹介があった方がよい。

◇実践報告の写真など掲示物の貼り方(磁石・テープ等)を事前に教えてほしい。

◇教師海外研修受講者は、個人の実践報告、ワークショップ、海外研修報告と学びが多い反面、負担が大きい。

◇同僚を気軽に誘えるようなプラン(午前中のポスターセッションのみの参加を募集するなど)を検討する。

◇ホームページなどで、ポスターセッションの表題をアップすると関心のある方が参加しやすくなる。